

学問と歴史

歴史のなかのアートとサイエンス

坂部 恵

「人間学のまどろみ」

- Michel Foucault(1926~1984), *Les mots et les choses—une archeologie des sciences humaines*, 1966(フーコー)『言葉と物—人文科学の考古学』、渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974年
- 60年以降顕在化した「進歩史観」批判。「非連続史観」「断続史観」(「衰退史観」)の対置。西洋文化・文明のエスノセントリズム批判と並行。(T.クーン『科学革命の構造』1962、レヴィ-ストロース『野生の思考』1962、サイード『オリエンタリズム』1978など)
- 「非連続史観」は、科学史の「デュエム-クワイン・テーゼ」、美術史のヴォリンガー『抽象と感情移入』(1908)などに、先駆的着想。

『言葉と物』の断続史観

- キーワードとしての「エピステーメー」(知識を生じさせる時代の深層の枠組)とその断絶
- 1. ルネンサンス(有機的アニミズム的自然観)。
2. 17世紀(古典主義時代)「表象」の時代
3. 18世紀末～19世紀初め(実証諸科学の成立、ロマン主義の衰退史観の登場、「モデルニテ」(「モデルネ」)の時代のはじまり)
- 『言葉と物』というタイトルは、マラルメら象徴主義文学者の、「言葉」と「物」の解離の自覚、「物」の重みを失った単なる符牒としての「言葉」批判とその克服の苦闘というモデルニテの時代の「病い」を暗示

人間学の四つの問い

- Immanuel Kant(1724~1804)
- 『純粹理性批判』(1781)を承けた『プロレゴメナ』(1783)の序文で、厳密な学的知識への懐疑を説いたヒューム(1711~76)によって「独断のまどろみ」から呼び覚まされたという。(「人間学のまどろみ」は、もちろんこれのもじり)
- 「世界市民的見地からする哲学の四つの問い」
- 1. 「私は何を知ることができるか？」(形而上学)
- 2. 「私は何をなすべきか？」(道徳(学))
- 3. 「私は何を希望してよいか？」(宗教(学))
- 4. 「人間とは何か？」(人間学)

先験的(超越論的)・経験的<折り目>

- 実証科学(生物学・経済学・言語学)の成立が、「人間の統治のついに立ちもどってきた年をしるしづけるとするのは、よほどお人好しにすぎまい。」(362)
- 19世紀的「実証主義」(A.コントラ)への批判・揶揄
- 「人間をそれ自身の有限性の基礎として価値づけようとところみるに際して突きあたる、先験的=経験的二重性」(同)
- みずからの学問性を(実証的知識をはなれて)厳密に基礎づけることは不可能(したがって(哲学的)「人間学」の構想は「まどろみ」、「夢」でしかない)

哲学は新しい眠り[まどろみ]を

- 「こうして、この<折り目>のなかで、哲学は新しい眠り[まどろみ]を<独断論>のそれではなく<人間学>の眠りを眠る[まどろむ]のだ」(363)
- 先験的(超越論的)・経験的という<折り目>を残しているかぎり、またひとつの<独断論>を出ない
- 「思考は、それ自身のうちに固有の視点を見いだすため二分化しつつある独断論の円環性を、根源的に哲学的である思考の敏捷さおよび不安と取りちがえているわけだ」(同)
- 19世紀以降、「哲学者」は実証科学を見下す一方で、馬鹿にされてきた。フーコーは自分は「歴史家」という。

人間学の「四辺形」を破壊しつつくす

- 「存在に関する根源的思考を再発見する」(363)
- ハイデガーのこと。晩年のハイデガーは、ニーチェを重んじ、哲学は詩にきわまるといって、哲学の「学問性」を捨てた
- 「心理主義や歴史主義のほか、人間学的偏見のあらゆる具体的形態を」(同)
- 人間に関する特定の実証科学を特権化して万能視する心理学主義、社会学主義、歴史主義etc.えせ哲学は19世紀以降今日まで跡を絶たない
- <人間学>の根こぎの最初の努力—ニーチェ
- 「人間の終焉は哲学のはじまりの回帰であろう」(同)